

地域おこし協力隊通信 (No. 31) 中種子町に大豆のチカラ？

農村の可能性とは「そこにこそ日本最後の成長余力がある：三〇年後の日本は国民がいちばん憧れ、もっとも豊かな産業人として生きがいを感じ、出生率が上がり持続可能な社会が実現している場所、それは農業・農村である」

これは元カルビー社長の故松尾雅彦氏の言葉。彼の2014年の著作「スマート・テロワール」に書かれている。タイトルの意味はムダのない農村自給圏。サブタイトルに「農村消滅論からの大転換」とある。

彼の提案を大胆に要約してみた。「耕作放棄地や休耕地を畑地に転換し、輸入依存率が高く自給率の低い大豆などの穀物や家畜を生産する。それらの原料は地域内での消費を中心に据えた加工商品とする。そのほかの商品では木材、リサイクルエネルギーなどもある。また農家と畜産農家との間で飼料用穀物と堆肥の交換をするなどの互酬の方法を確立する」

これを実践することにより地域内に自給圏が確立でき、全国的にみて15兆円の産業を創造できるといふ。県外から製品を買い、県外に原料だけを売るのはなく、まず地域内で生産した

商品は地域で消費し、またそこに新たな付加価値が加わり、訪れた観光客がこぞって購入する。輸送などのコストも削減され、いわゆる地域内の対外貿易収支を黒字にするということなのか。

では一例として大豆の供給と需要を調べてみた。日本の年間需要量は約338万トン。1015年の大豆輸入と国内生産の割合では輸入が93%、324万トンで約2006億円。そして国内生産が7%、約24万トンで約535億円。輸入依存が顕著に表れていて、そこに可能性があることが分かる。

大儲けする商売の基本は「同業他社との競争が少なく、需要があり、ちよつとした寡占状況が作れること」だと思ふ。島内の人口は多くはなく、年間宿泊客も20万人ほどの分母で爆発的に大儲けできないだろう。しかし、こういった需要のある商品に着目して、生産販売することで自給圏を確立するということにつながるという提言には賛同したい。離島ではなかなか困難な考え方も知れないが、地域活性化の起爆剤には十分なり得ると考える。

(山村)

パナソニック女子陸上競技部歓迎

スポーツ合宿等誘致推進協議会

3月6日から14日までの9日間、パナソニック女子陸上競技部が合宿に訪れ、3月8日に歓迎式が開かれました。スポーツ合宿等推進協議会から種子島黒豚と中種子町特産品協会からたんかんが贈られました。

パナソニック女子陸上競技部は、平成30年度クイーンズ駅伝で、前年度に引き続き2連覇を達成しており、安養寺俊隆監督は、「新元号初代チャンピオンと3連覇を目指し頑張ります」と挨拶しました。



15種目ランクイン、3年連続受賞

県教育委員会主催『チャレンジかごしま』



鹿児島県教育委員会主催の『チャレンジかごしま』において、星原小学校が15種目のランクイン、3年連続の学級賞受賞という快挙を成し遂げ、3月8日に表彰式が行われました。

受賞にあたり、生徒代表の松下恵さんは、「毎朝のうずまき運動、体育の授業、仲良し体育の時間に1年生から6年生まで頑張ったおかげ」と話しました。また、中種子中学校も学級賞を受賞し、同日表彰式が行われました。